

農林水産省との意見交換を実施 ～みどりの食料システム戦略について～

豊岡市発の事例を紹介しました

農林水産業を取り巻く様々な課題の中、地域の将来も見据えた持続可能な食料供給システムの構築が急務となっています。国内の食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現させるため、国では「みどりの食料システム戦略」の検討が進められています。その中で農山漁村発の取り組みの事例として、豊岡市のコウノトリと共生する地域づくり【農山漁村×生物多様性】が取り上げられています。4月8日に農林水産省と豊岡会場をオンラインで繋ぎ実施された意見交換会では、ひぼこの大地を守る会 吉田準一会長とともに、農業委員会 大原博幸会長が参加し、市の取り組みについて活発な議論を行いました。

環境と調和した食料生産、農産物のブランド化と観光業等との結びつけなど、持続的な地域の産業基盤の構築に向け、今後の取り組みが期待されます。



オンラインでの意見交換の様子

新規就農者の紹介

「珍しいもので特徴ある農業を目指したい」

武田さんは出石町寺坂で両親と住んでいます。学校を卒業後、約二十年間京都で野外活動センターや飲食店等で働いていました。いつかは豊岡に帰ろうと考えていましたが、市役所と相談した結果、地域おこし協力隊という制度があることを知り応募しました。地域おこし協力隊はUターン、Uターン等地域外の人材により、地域協力活動を行ってもらい、定住・定着をすることで、地域での生活や社会に貢献していくことを目的としています。令和二年度は農業関係でも多数の応募があり、三人が活動されています。地域おこし協力隊員が一堂に会する交流会もあり、各隊員が情報交換されています。

武田さんは現在グリーンいすしで活動していますが、今後一般社団法人但馬地域経済活性化機構を構成している(株)Teams、中谷農事組合法人、(株)夢大地、(有)あしたで、農業技術の習得をめざして活動する予定です。三年間(2023年まで)の活動が終了したら、自宅のある出石町寺坂を中心に農業経営を始めたいと考えています。稲作や野菜作りに関心があり、どんな農業をやるのか、京都で働いていた経験を活かし、珍しいもので、特徴のある農業を地域おこし協力隊の活動を通じて考えたいそうです。今後は、地域の担い手として、農業のみならず幅広い分野での活躍を期待します。

(農業委員 大原 博幸)

地域おこし協力隊

武田 旭さん 35歳 男性 (出石町寺坂)

●協力隊任期

2020年11月1日～2023年10月30日

●プロフィール

京都市からUターン。実家が所有する約50アールの農地を中心に独立自営の新規就農を目指す。野菜栽培にも関心あり。



ご不用の古米、くず米を無料引受いたします。

米粉にして牛の飼料として活用しています。

牧場では持続可能で自然と調和した畜産を目指しています。

※カビや虫がついたものは不可となります。

詳しくは下記へ問い合わせください。

電話 0796-29-0808 担当 わただ



こうのとり風土セントラルファーム
KOUNOTORI-FUDO CENTRAL-FARM

きばっとなる人らあ④

このコーナーでは、地域で頑張るみなさんを紹介しています。

豊岡農業スクール 卒業生

藤原 大樹さん (竹野町二連原)

竹野南地区にお住いの藤原大樹さんは、大阪で歯科技工士をしていたものの、諸事情により平成31年3月にUターンし、農業スクールを経て農業を始めた期待の若手就農者です。春から秋にかけては父親の水稲栽培を手伝いながらキャベツ・ピーマンを栽培し、冬場には椎茸栽培を行っておられます。ピーマン栽培についてはJAのピーマン部会に所属して経験豊かな栽培農家に指導を仰ぎ、椎茸についても栽培農家に実習に行くなど、栽培方法の習得を積極的に行って農業に取り組む姿勢は、地元農業の将来を担える人材として周囲の期待も大きい若者です。

Uターン直前には待望の長女が誕生し、その後、長男にも恵まれて家族4人の大黒柱として毎日野菜作りに励んでおられます。

今年は春からキャベツ2千本・ピーマン9百本を栽培し、秋には菌床椎茸を1千床程度栽培する予定だそうです。

最後に今後の目標などを伺ったところ、「今後は農業従事者の高齢化により耕作困難となる圃場の増加が予想されるため、稲作への取り組みも考えている。」と、非常に頼もしい言葉を聞くことができました。(農業委員 瀧下 康徳)



頼もしい若手農業者です

親子で認定農業者 農業に夢を持って (水稲・野菜栽培)

田中 政明さん(71歳)、
田中 吉章さん(42歳) (日高町栃本)

田中さん親子は揃って認定農業者で、現在は、「日高農園たなか」を息子さんが代表として経営されています。

農業を始められたのは、会社員をしていた40才の時に足を痛めたのがきっかけとなったそうです。当初5ヘクタールから始まり現在は16ヘクタールを作付されていてトラクター、田植え機、コンバイン、乾燥機等も大小複数台所有されています。春、秋の農繁期にはパートさんをお願いし、農閑期には西瓜、葡萄を作付されているそうです。

今後の課題と悩みは、田圃の面積が小さいため中々水が来ない、作付地域がバラバラでまとまらないので手がかかる、農薬や肥料代が高いこと、もっと作付面積を増やしたいが待っていても中々増やせないこと、コロナ禍の中で米の価格が下がり先が見えないこと等、色々不安要素は多くありますが親子で頑張っていますとのことです。

農業へのこだわりは、有機肥料を使用していることですが、今後も単価を下げ努力を続け、ブランド米を目指して精進していきたいと今後の抱負を語っておられました。今後も夢をもって頑張ってください。(農業委員 平野 薫)



田中さん親子